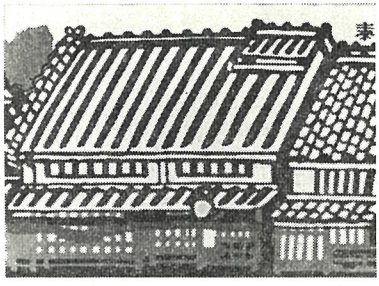

随想

シャルトルの復活節

外村清子

シャルトルは、永い憧れのところであった。モンパルナスの駅から汽車にのってパリを離れると間もなく、郊外の丘に赤屋根の住居が林に見えかくれして目に泌みた。市内の灰色との比較がきわだったからである。ヴェルサイユ宮殿を森の彼方に眺めてすぎると、もう後は田舎の風景になった。そして一時間余りして、とある疎らな林をすぎたと思うと、まなかいに、壮大な聖堂が丘の上に在った。ゴシック建築を代表するこのシャルトルは、全ヨーロッパに君臨するといわれるとおり、壮重な威厳をもって鎮まり立っている。感動が全身をつらぬいた。そして嗚呼と嘆声を上げて見入っている中に汽車はすべるように駅に着いた。

駅から雨にぬれた石だたみの道を往って看板の類は一つもなく、人影も少ない静かな町通りを急いで、あこがれの聖堂についた。前の広場はゆったりとして、まわりの建物は衛士のように静まっていた。聖堂の正面に吸いつけられるように近づいて見上げる数々の彫刻。真上のキリストと四福音書のシムボル。列柱の予言者たち。ことに予言者たちの石像は推古仏のように気高くあった。数百年の風雪に曝された衣紋のかげりの美しさに目も心もはなれなかった。この神厳な作が無名の石工たちの手で素直に誤ちなく生れた時代は人間の歴史の中でどんなに思い返され崇められても足りないものではあるまいか。柳先生がよく教室で話されたが、何と中世は輝かしい時代だったかと今更思い返すばかりである。

永い歳月の間民衆によってすりへらされた石段を通って堂に入ると、中は林のやうな暗さと沈黙の広さであった。頭をめぐらすといくつかのスティンドグラスが静かな五彩の光を高い空間に投げていた。堂の中も純粋なゴシックの工作がよく保存されているので幾度も幾度もめぐり、眺め、仰いで時を忘れた。

その内に一人の神父が見えて、「今日は特別なミサのため、パリから学生の巡礼が着くので、一応外に出るやうに」という。地階の売場でいそいでエハガキを求めて外に出ると間もなく御堂の扉はすべて閉された。小雨はなお降りつづき、冷たい風さえ加わって寒さにふるえながら列柱の予言者たちの下に身をよせて、わずかに堪えていた。そうして、かなりの間を待っている内に、学生たちの巡礼の近づくのが見えはじめた。

パリのソルボンヌ大学生を主として世界中の若者たちが参加し、パリからここまで二日分の食糧を背負い、一夜の仮泊をへて徒歩でここに向って来た。生憎の雨、冷た

い風の行進は体も服もぬれとおして、靴も一入重たく、みじめに見えた。学生たちは次々にいくつかのグループをなして、先頭に或は木で作った素朴な十字架を、或は布に画いた十字架をかかげ、静かに聖誦を唱えながら列をなしている。総勢すべて男女一万人だという。風雨にうたれて服装はみじめに見えたが、その顔はいずれも明るくよろこびと望みにみちているようであった。高く低く唱える聖誦のリズム。その行列は二時間もつづいたであろうか。途中の難渋に堪えかねて担架で運ばれている女学生も数人あった。

聖堂の周りに、みなが荷を下してととのえるとやがて高い塔から鐘がなり出した。そして高く大きな扉の開かれる中へ、彼らは静かに吸込まれて行った。そして一万人の全部が入って後、一般の私共も入堂をゆるされたのである。光はろうそくの灯だけであった。それがうすぐらい中にあちこちにゆれて、石の床に腰をおろした満堂の会衆である。やがてパイプオルガンのひびく中を、白衣の修道者たちがろうそくを手に手にかかげ、列をなして入堂。祭壇を前に四列に並び、中に通路をあけて二人づつ向い合って起立。その数は、二百人もあろうか。時は夕の七時、ミサがはじまったのである。厳粛そのものの中にオルガンは更に新しくひびき、主唱者のハレルヤ独唱、それにつづいて大合唱がはじまる。さすがに広く高い堂内も、たちこめるその唱声を包みかねて天にも裂けよと思われるばかりであった。ミサは更に進んで、キリエ、グロリアなどのグレゴリオ聖歌の斉唱に移った。人の声がなしうる一番美しいこの歌声は同時に壮厳そのものであった。かつてベートベンは自分の全作品をもってしても、その一小節の美しさにも及びえないと嘆いたというグレゴリオの聖歌が今ゴシックの最上の聖堂にみちて神をあがめている。復活節のころ、シャルトルの聖堂で大壮厳ミサが行われるということを前から聞いていたが、はからずもこの日にめぐりあい、参列出来たことは何と有りがたい幸せであったであろう。

中世の立派で美しい聖堂が、現代の人々の単なる観光の場所としてでなくて、かくも心強い信仰のよりどころであり、ことに

嵯峨野吟

渡辺英一
（女子大学教授）

手入れせぬ　池一つあり　春の午后

苗代を児に見せんとて　畦（あぜ）を行く

れんげ輪の　れんげの上に忘られて

竹籔をまがりしところ　藤の花

虚子の碑のあたり人無く　風光る

児に向くる　レンズの隅の柿若葉

柿若葉　児の背伸びして後二寸

竹籔の　無番踏切　青嵐

夕桜　嵯峨豆腐など求めけり

化野（あだしの）の名に　惹かれ行く　春の月

多くの若者たちの力強い勤行の場として生きていることに一入感動した。

ヨーロッパ六十日の旅の中で、もっとも強い印象をうけたのはイタリアのアッシジわけてもあのカルチェリの草庵と、このシャルトルの聖堂であった。これらはこの世の旅にとっても二つの大き札所のやうに、いつまでも、忘れられぬものとなるであろう。

（昭4女専英文卒・主婦）

山靴のおと

一井　三郎

鈴鹿愛知川源流　（昭30　夏）

愛知川のながれの岸の朝明けにからす
あげはの舞ひ上りをり
愛知川のながれはきよし朝な朝な水浴
みすれば肌につめたし

十勝岳山麓　（昭32　夏）

暮れ残る十勝のふもとひろびろと岩も
もだせりわれももだせり
十勝岳ひろき裾野の夕まぐれひそけき
花と物語りする

遠見尾根　（昭34　春）

春の雪ふみくだきゆく遠見尾根大遠見
の道のいや遠長き
尾根ゆ見ゆるまなかひの沢の雪の上に
かもしかをりと山人のさす

朝日連峯　（昭36　夏）

みちのくの天狗角力取山といふ山のや
どりのまどかなる月
月明に龍ケ嶽みゆ露しとどおりゐる草
に夜は更けぬらし

比良山スゲハラ小屋をひらく　（昭36　秋）

比良山に小屋をつくりてつどひして歌
ふ歌声みなうらわかき
比良山の人あまり来ぬ山かげのみちの
ほとりのりんだうの花

伯耆大山　（昭36　冬）

元谷にふりつむ雪のこのいくひ日ごと
にふればいよよふかしも
雪やみつ北壁見ゆと子らのいへばわれ
もいでゆき雪すべりする

木曽御嶽　（昭39　冬）

わけて入る奥山道に雪しろく木曽の御
嶽しづまりてゐる
大檜雪をもちつつひろげたる枝はあか
るく光みちたり

赤河原　（昭37　冬）

冬枯れの木立音なく赤河原さむざむと
降る雨にぬれたり
山峡のひたくもる空に甲斐ケ嶺は白く
静けくそびえたちたり

舟渓山荘　（昭39　冬）

荒谷の冬のさなかのながき夜をいねが
てにゐる山の宿なり
小屋番の若きをとこもの言はずひそ
まりてゐる山の宿なり

ふたたび比良山にて（昭42　冬）

吹雪する二月の末の比良の奥の山小屋
の夜をひとりさめるる

雪ながら明けにけらしなほのぼのと窓
にただよふあかつきのいろ

〈後記〉もういい加減にやめようと思いながら、わたしの山歩きはまだいくらかつづきそうです。ことし還暦のとしを迎えた記念にもと、山の手帖からぬきがきしてみました。ふだんはあまり歌などつくりませんが、山を歩いていますと、ときどきこんなものが出来るのが不思議です。ご情鑑いただければ幸甚です。（高校教諭・国語）

風変り牧師の記

平田　哲

「牧師は自由業だから、いいなァ」とよく言われる。時間的に拘束されない仕事の性質は、確かに一面、自由でノンビリして見えるかもしれない―日曜日の礼拝、週に一度の祈祷会、聖書研究会、月に一度の婦人会、青年会などの茶会の準備と、それに出席することのみが仕事とするならば。しかし、教会のそれらの集会に人々を出席せしめんがために、牧師の時間は多く費される。書斎に閉じこもり勉学に励むことにより、彼の説教、聖書研究を魅力あるものとして磨きをかける。或いは、信徒を訪問し、手紙を書き、訪問客の面接も大切な仕事だ。そして大抵の牧師は、教区の何かの委員会に名を連ね、教会附属の幼稚園の経営にも頭を使わねばなるまい。いやはやウルトラマンのごとく縦横無尽に駆け廻る姿―これこそ牧師の毎日なのであります。

さて、私は労働者伝道に身を挺して十年牧師らしくない牧師として過してきた。人人を教会に連れてくることのためにエネルギーを費すのでなく、私の方から世の中へ―人々のいるところへ出かけていって、仕事をしてきた。働く仲間に出合い、共に生きることの中でしか、もはや私にとって福音の伝達は不可能なのである。「へえ――平田はん、牧師だっか??」労組の研究会や労働学校など各種のプログラムの中で出合った人々が、どこかで誰かから、私のことを聞いてきて、おどろいて問いかける。ヘンな外人ならぬ、ヘンな牧師は彼ら勤労大衆の中にあるキリスト教および牧師への偏見と無関心への弁明と説得に努めるのである。私および、私の教会員たちは、「教会が社会に出てゆく」体勢のもとに、週日を送っている。日曜日は、われら福音の闘士たちの栄養補給の場であり、いこいの場であり、研鑽の場である。

「神の受肉がこの世界で起った。イエスキリストは御言に関心をもつ人々を神殿の中で待ってはいなかった。反対に、彼の姿は神殿に近よらない人々の中で見出された」（シモノフスキー著「産業社会に於けるキリスト者の証し」）

ご参考までに私の具体的活動を記してみたい。

(1)関西労働者教育協会の事務局長としての活動――毎年二月・三月にかけて十八回の労働講座を開設、四月から月に一度づつ週末ゼミナール、同志社夏期労働ゼミナールなど、労働者教育方面のプログラムの立案・実施。